

《書評》 坂野正則ほか著

パリ・ノートル＝ダム大聖堂の伝統と再生 ——歴史・信仰・空間から考える

(勉誠出版、2021年)

辻田 青
TSUJITA, Sho

本書は、2019年4月のパリのノートル＝ダム大聖堂（以下、「ノートルダム」とする）火災の影響を受け、坂野正則氏によって同年10月に主催された「パリ・ノートルダム大聖堂の再生へ向けて——歴史/信仰/空間から考える——」と題されたシンポジウムの内容をまとめ、ブラッシュアップさせたものである。序章で坂野氏が言及しているように、大聖堂に対し、「キリスト教神学・建築史学・西洋史学による領域横断的なアプローチを試み」（3頁）た研究だと言える。

ノートルダム再生を巡る議論は一筋縄ではいかない。着工から860年が経過した歴史ある大聖堂は、世界文化遺産である以前にフランスの象徴でもあり、カトリックの大司教座聖堂でもあり、信徒たちの祈りの場でもある。誰のものなのか、という視座によって再生のかたちも大いに変化するだろう。「復元」か「復原」か、はたまた「刷新」か、という問いも問題解決の困難を極める要因となっている。この初期ゴシックの代表作は、時代によって大小様々な改変を重ねている。そして現在も信仰空間として機能している以上、決して中世の遺物などではなく、プロ

セスの只中にあるからだ。本書はこの問題に対し、ノートルダムを時間論・都市論・比較論の三つの論点から洞察する。本書は諸分野の専門家による論考と、コラム、特別寄稿から構成されるが、本評ではまず、序章を除く六本の論考を概観し、中でも評者の関心を引いた第5章を詳しく見ていく。

第1章「ゴシック時代の教会建築を巡る神学的理解——聖書解釈との関連から」は、坂田奈々絵氏による論考である。ノートルダムが建設された時代であるゴシック期の背景にある神学思想を踏まえ、当時の教会建築へのまなごしを考察している。嵩井里恵子氏による第2章「中世における都市パリと大聖堂——シテ島東側の空間形成を中心に」は、ノートルダムを中心としたシテ島東側の空間を、中世パリの都市史の中に位置づけて論じたものである。諸施設によって構成されるシテ島東側空間の歴史的発展を眺め、そこに確認できるノートルダムの宗教的、行政的役割を考察している。第3章「大司教座聖堂としてのパリ・ノートル＝ダム大聖堂の成立——近世空間における権力と聖性」は編者・坂野氏による論考で、近世におけるノートルダムの内部装飾を中心としたリノベーション事業について、中世からの持続性を踏まえながら、フランス国王、パリ大司教、そして信徒たちの組合である兄弟会の三つの視点からその背景を論じている。中島智章氏による第4章「パリ・ノートル＝ダム大聖堂の近世におけるリノベーション」は、3章で述べられた事業について、特にアーケードや内陣を飾る「五月奉納画」や主祭壇などの内陣空間の装飾に関してより詳しく考察したものである。第5章は後述することにして、先に第6章を紹介する。第6章「近現代ヨーロッパにおけるゴシック様式大聖堂の社会史」は、松嶋明男氏による論考である。本章ではノートルダムと同じく火災被害の過去を持つフランスのランス大聖堂とイギリスのコヴェントリー大聖堂を宗教社会史の文脈から比較し、ノートルダム再生の方向性を探っている。

さて、ノートルダム再生問題の中で最も注目されたのは、件の火災で崩落した、ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュク（Eugène

Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814–1879) によって19世紀に修復された尖塔だろう。これに対し詳しく検討した論考が、加藤耕一氏による第5章「ノートル＝ダム大聖堂とヴィオレ＝ル＝デュクの木造尖塔」である。氏は、ヴィオレ＝ル＝デュク設計の尖塔は「偽物」として批判の対象となっており、その影響を受け、元フランス首相エドゥアール・フィリップの「元通り (identique) に再建するのか、現代の技術を用いた新しい尖塔 (nouvelle flèche) にするのかを決断するために (…中略…) 尖塔再建の国際建築コンペ (concours international d'architecture) を実施する」(194頁) という発言にまで至ったと指摘する。特に非難の的となったのが、現代的な材料と技術への置換と、尖塔の付け根部分に施された彼自身をモデルにしたとされる使徒トマス像であったという。しかしながら本章では、ヴィオレ＝ル＝デュクによる新たな尖塔は、構造の面で見れば元の尖塔と同じ木造であるという点を踏襲しており、なおかつ元の尖塔が修復される原因にもなった強風に十分に耐えられるように改修されていたという点で再評価している。また、ヴィオレ＝ル＝デュクによる修復時、元の尖塔は18世紀に倒壊の懸念から解体されており、確実な設計資料も存在しなかったため、今回の再生問題における「復原」は19世紀の時点で不可能であったと指摘する。そして最後に、忠実な過去の再現としての現代の文化財修復の価値観が圧倒的に正しいもので、その規範に基づかないヴィオレ＝ル＝デュクの修復は間違っていると断言することは適当なのだろうかとの問いを投げかける。加藤氏は「文化財のルールもまた、時代の状況に合わせて少しずつ変化してきた」(222頁) と指摘する。例えば文化財学を専門とする福島綾子氏は、2012年の研究成果報告書の中で、信徒による教会堂の「営繕」の文化財的価値を論じる⁽¹⁾。ヴィオレ＝ル＝デュクによる修復は、確かに現代の文化財保護の観点では否定される「刷新」ではあったが、今後、そこに新しい文化財的価値を見出すことは不可能ではないだろう。

特に一つの教会建築に対する事例研究の場合、異なる分野がそれぞれ独自に研究することが多く、学際的な研究は稀である。その点、本書は

複雑かつ多面的な教会建築の在り方を探る上で意義深く、ノートルダムの可視的・不可視的な様々な「かたち」を浮かび上がらせてくれる。この再生問題は、フランスと同じく歴史ある宗教的建造物を多く持つ日本にとっても対岸の火事ではないだろう。本書は文化財保護としての一方的な視点だけでなく、多角的な向き合い方を示唆してくれる。ただ、神学や美術史学、文化財学との連携が不十分である点は残念に思う。実践神学を専門とする原敬子氏の執筆は、特別寄稿の日本語訳とコラム一本に留まっている。

本書でも言及されているように、2020年7月9日にマクロン大統領は「昨年の壊滅的な火災で崩壊したノートル＝ダム大聖堂の尖塔を正確に再建することに同意⁽²⁾」した。その言葉通り尖塔は「復元」の道を進み、2024年の12月にはノートルダム全体の一般公開が予定されている⁽³⁾。

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程前期課程在学 つじた・しょう)

注

- (1) 福島綾子、2012、「宗教遺産の近代的営繕と動態保全の仕組みに関する研究——地域の特性としての宗教遺産継承を目指して」平成24年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書。
- (2) France 24. 2020. "'Consensus' that Notre-Dame spire should be rebuilt in original form." July 9, 2020. Accessed December 16, 2023. <https://www.france24.com/en/20200709-consensus-that-notre-dame-spire-should-be-rebuilt-in-original-form>.
- (3) France 24. 2023. "Macron marks one-year countdown to reopening with visit to Notre-Dame." December 8, 2023. Accessed December 16, 2023. <https://www.france24.com/en/live-news/20231208-france-s-macron-says-notre-dame-cathedral-to-reopen-on-time>.

